



2011年11月9日放送

漢方頻用処方解説 白虎加人参湯

日本大学 統合和漢医薬学分野 上田 ゆき子

白虎加人参湯は『傷寒論』と『金匱要略』が出典となります。『傷寒論』には白虎加人参湯に関する条文が5つあり、太陽病上篇および下篇、陽明病篇にわたって広く記載されています。代表的な条文を紹介すると、太陽病下篇に「傷寒、もしくは吐し、もしくは下して後、七八日解せず、熱結んで裏に在り、表裏共に熱し時々悪風し、大いに渴し、舌上乾燥して煩し、水数升飲まんと思するものは白虎加人参湯これを主る。」とあります。

大訳すると「急性病で7, 8日たつて寒気などの表症はなくなったが、熱が裏に達して表裏ともに熱く乾き、舌は乾燥して水を欲しがるようになった。これは白虎加人参湯の主治である。」となります。要は、感染症などで高熱と多量の発汗のために脱水状態に陥り、口渴の強いものに用いる処方ということです。しかし、今日では抗生物質や輸液療法が発達したために、古典のような感染症の脱水に用いる例は少なくなっているように思います。

では『金匱要略』の条文も紹介いたします。『金匱要略』では「太陽の中熱は暍これなり、汗出でて悪寒し身熱して渴す。白虎加人参湯之を司る。」とあります。大塚敬節は「暍」とは日射病のことであると訳しています。大訳すると「日射病で汗が出て体に熱がこもり喉が渇く。これには白虎加人参湯がよい。」ということになります。『傷寒論』のような急性感染症でなくても、日射病のような病態でも効果があるということです。

日射病、暑気あたりの薬と言いますと清暑益気湯が有名ですが、白虎加人参湯も覚えておくと便利です。使い分けは、清暑益気湯はいわゆる夏ばてのとき、慢性的に食欲も体力も落ちて身体が虚している人に使います。白虎加人参湯は俗にいう熱中症の時に使います。炎天下の屋外での作業やスポーツなどで、急に具合が悪くなったときなどに、すぐにその

場で飲んでいただくというイメージです。

さらに、白虎加人参湯は今日では古典を超えて幅広い疾患に使用されています。とくにアトピー性皮膚炎や乾癬、蕁麻疹といった皮膚疾患への使用は、皆さんも経験があると思います。皮膚疾患への応用は、古くは金元時代頃から、斑という皮膚症状に対し使用するという記載があります。日本では曲直瀬道三の『衆方規矩』に以下のように書かれています。「熱が盛んでいきれ渴いて（ほてり）止まず、また赤斑を發して（皮膚發疹）脈が虚するものは白虎湯に人参を加えて用い、これを化斑湯と名づける。」。いきれ渴くとは、ほてるということです。赤斑を發するというのが皮膚の發疹のことです。

有持桂里は『校正方輿輓』に、「人参化斑湯は即ち是れ白虎加人参湯である。發斑に人参化斑湯を用いることは通例の劑である。」とし、白虎加人参湯を皮膚症状に多く使用していた様子が伺えます。私の経験では、皮膚症状に使う場合は、口渴とほてりの2大症状のうち、とくにほてり、つまり局所の熱感があるかどうかポイントだと思います。

次に口渴という症候に注目しますと、様々な原因による口渴に有効性が報告されています。いくつか紹介しますと、高齢者の口腔内乾燥症、シェーグレン症候群、糖尿病あるいは抗精神病薬や抗コリン薬の副作用としての口渴、口腔内放射線照射後の口渴などに有効であったとの報告があります。これらの報告はいずれも漢方医学的所見によらず、口渴という症状のみで有効性があるということですから、白虎加人参湯を口渴に用いる場合は、あまり証にこだわることなく使用できる、ということになります。

では生薬構成をみてみましょう。白虎加人参湯は文字通り、白虎湯に人参一味を加えたものです。白虎とは、中国に伝わる4つの神様のうちのひとつです。北を守る神様が玄武で、玄武湯すなわち真武湯のことです。東が青竜で青竜湯、南が朱雀で十棗湯、西が白虎で白虎湯というわけです。白虎の色は白です。ですから白虎湯は主薬が白い石膏であるのです。白虎湯は石膏、知母、硬米、甘草の4つの生薬からなり、これに人参を加えたものが白虎加人参湯です。

大塚敬節は、白虎湯証で高熱が続いて体液が消耗してしまったものに、人参を加えて使用すると述べており、白虎加人参湯は人参を加えることで脾胃への働きを高め、体力の消耗を補う働きが増したと考えられるのです。

各々の生薬の薬性をみてみますと、『本草備要』では「知母は渴を止める。石膏は渴を止め、大渴引飲を治す。硬米は渴を止め、脾胃を整える。人参は煩渴を除き元気を補う。甘草は生薬を協和せしめ百薬の毒を解す。」とあります。渴とはかわきのこと、大渴引飲とは大きく渴いてたくさん飲むということです。つまり5つの生薬のうち甘草以外の4つの生薬はすべて渴きを止める作用を有するという事です。ですから主症状として口渴がとくに大事な点となるわけです。主薬の石膏は含水硫酸カルシウムで、効用は止渴のほかには清涼、解熱、鎮静作用であります。知母はユリ科ハナスゲの根茎で、石膏と同様に清涼、解熱、止渴、利尿作用などを持ちます。硬米は脾胃を整え石膏が冷やしすぎるのを防ぎ、甘草は諸薬の調和作用があります。これらに人参の生津、補気作用が加わります。

次に白虎加人参湯の漢方医学的所見ですが、自覚症状では先ほど述べたように、口渴、多

飲、火照り感があり、脈が洪大で舌は乾燥し、白苔や黄苔が見られることが多いです。また腹診では腹力が適度にあり虚していないことが多いです。つまりどちらかという実証で陽性タイプの人に使う薬ということです。ですから脈やお腹が虚している所見はないほうがよいということになります。短期的に虚証の人に使う場合もありますが、その場合は冷やし過ぎないように注意深く診る必要があります。

次に鑑別処方についてです。口渴という点から五苓散との鑑別を考えてみます。五苓散は水の偏在、つまり分布異常に使う薬で口渴がみられます。しかしそのほかに浮腫や嘔吐、水様下痢、頭痛などの水毒の症状があるのが特徴です。白虎加人参湯証の口渴は脱水によるものなので、水毒の傾向はみられません。

次に高齢者の口渴という点で、八味丸との鑑別です。八味丸はとくに高齢者の腎虚の症状によく効く薬です。この場合は足の裏のほてりがみられる場合はあるけれども、全身性の熱感やほてりはありません。また腹証では小腹不仁という特徴的な所見がみられます。

熱証の皮膚症状に使うという点で、黄連解毒湯との鑑別です。黄連解毒湯は湿疹や蕁麻疹など急性で赤みの強い状態に用いますが、口渴や多飲などの症状は通常みられません。ですが、局所の炎症が強い所見では、あえて黄連解毒湯と白虎加人参湯を併用し清熱効果を高めるやり方もあります。

最後に症例をひとつ紹介したいと思います。40歳代の女性で、アトピー性皮膚炎の患者さんです。職場でのトラブルからアトピー性皮膚炎が悪化し、精神的にもうつ状態になり、職場を退職してこられました。初診時には強いストレス状態から、とくに顔から首にかけて真っ赤で、ところどころかきむしって滲出液が出ている状態でした。脈も腹力も充実しており、胸脇苦満がありましたので、黄連解毒湯に柴胡加竜骨牡蛎湯を合方して経過をみておりました。徐々にはよくなりましたが、なかなかすっきりとはいきません。そのうちに夏になり、汗が出るようになって、ますます痒みがひどく、口渴多飲がみられましたので、黄連解毒湯に白虎加人参湯を加えて処方したところ、非常によく効き、秋に入って、みるみる湿疹が良くなり喜ばれました。

この症例では夏の時期に入ったことで、より口渴多飲、熱感が前面に出てきましたが、もしもっと早くから白虎加人参湯を加えていたら、夏の悪化も防げたのかと考えさせられた症例です。

このように白虎加人参湯は、古典に準拠した使用法を越えて、現代では幅広く応用できる処方となっています。生薬構成もシンプルで分かりやすいので、他の方剤との組み合わせもしやすい処方です。とくに口渴という症状は、西洋医学的な治療法も効果的なものは少ないので、ぜひ白虎加人参湯を試してもらいたいと思います。